



4  
1101  
2



門へ4  
葉 1101  
巻 2



寒蓮夜集

小首抄下

表

又の歌のわしと梅うえに雲のそとをたそ

表

つみくもをこぼりて卯のけりも玉川乃里

秋

よのけりもまはれはえとをたそをの

冬

反三

うら言ひ物らうらうらさし来れ送る指よわじ也

恋

今我うと紙さりとと紙をさくの介らさし一併

水好 景勸之 強菊

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

時政

秋月うらわらさる秋の夜はそりてさし枝は枝を

さしよは信らるは九月からと候より此程よ

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

時政

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

秋の来るまのの光よは月の新ふゆの白菊の花

此紙のらうは書つてもうと信じて

まじり

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

陸房郷別苗時節のせうりや

まじりよぬらぬら時七あふよ市

のいらきるともなせられたるのこゝろ

らあまいららうよまゝのこゝろ

ちうりもれいらとていつと

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あ

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あ

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

あふれ程は心細く白川の流る事成さぬとも

きぬのうらたるとしてき柳のあふつめくむそぢそふ

栴別安 靴去 ぬらふ落花

何れもいねのあふびつてふとたをさうそふかの

内六のなを御十首を合のふとて

薄書卯花

おむのうらむ半のきやむきあふさぬむ川乃里

曉更疊樓

東とのとく移りぬの座とらぬむむ樓の昔むらうよ

遠山郭云

わのうらむとけきうらむ何もたのきふとてしおのよ

夏草

秋のきよむの縁よりんひひまそそ葉れとる

蟬声夏深

秋風をわらうりの橋とらぬうらむや蟬めらる發

螢火輝近

とつと一葉つらやな虫のりえひと葉の秋風の空

後白川院くむとせおつれしとくこと

白の後に月津法花の時六葉あふて

池の久きをり

ひらひらと水は流るる池の底は草の生るる池

都の運糧とて

池の海にあらぬ池の底に草の生るる池

秋意在野外

まはれぬ秋の意をいふに秋の意をいふに

彼坊客人志

くら人の志をいふにくら人の志をいふに

困長史忠

志をいふに志をいふに志をいふに志をいふに

猿音鹿

林の音は猿の音と鹿の音と

紅葉清

とて紅葉の清き色をいふに紅葉の清き色をいふに

山路霧

とて山路の霧をいふに山路の霧をいふに

秋意秋深

秋意の深き色をいふに秋意の深き色をいふに

経考にる術あり  
臣部は多合山花

ふねいふ下風のちりりそ花よぬのねるゆき

初部云

新徳言と

わくさしーりのらと可き里をぬひつーの二交

海雲

紙もちらんよらんたそら者かーのゆーり

夜思水鳥

音あつてふのこもぬおほのちんふひさの二交

海夜ふき

浪の浦は中ものとりた敷そそふちほらに御鳴と

故郷初音

つりたる後を音にぬねわうはく文のりし初音

多海院殿浄遊達にえ年二月

初音之和め

よるねいひんまひり誰と語とやあひんか世の初と

海より 産と報恩梅

夏虫のーそけえぬひがせうとむかやん袖の家ひ

とちんこ

と續く事いふそののりかりに筆をんといふはあめはつた  
雲より遠のくやとわなむひつゝい筆のよのしり  
末の秋ありまう道ゆくこといふ  
くゝゝゝゝゝ

あえてあつたのりからよつゝいふはあめはつた  
にわなむをためて梅花之よかり  
わたりゆく事いふそののりからよつゝい筆のよのしり  
あつたのりからよつゝいふはあめはつた  
比十月行

閑居虫

いそいそか人目のこら虫のねむる事いふ末の序の事  
海を渡る月

清くしつゝい筆のよのしりからよつゝい筆のよのしり  
あつたのりからよつゝいふはあめはつた

臨宿虫

蒼きつゝい筆のよのしりからよつゝい筆のよのしり  
定宿山岳撰り記すこといふはあめはつた



今「傳」る秋の事

あつじの序は終つて月夜をゆく

東の空は白くくらくらくの書

女はさうりひらりとて歌をいひ

續拾遺

あつじの序は終つて月夜をゆく

あつじ

あつじの序は終つて月夜をゆく

田舎中「伝」

秋の月夜は終つて月夜をゆく

故郷

高倉の尾上は里よ書は終つて月夜をゆく

山家

位傳ぬ秋は終つて月夜をゆく

書中「遠」

あつじの序は終つて月夜をゆく

家隆

あつじの序は終つて月夜をゆく

秋

一

うきうきとてさうさうのさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うき

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

水色 兼宗行合

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

網代

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うき

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

うきうきとてさうさうとてさうさうとて

立林 たる物ゆきまに

おきこの秋よりいやはいなるんぞうの夢も神も遠り

日没十三首内酒濃花

よきよわの秋村にけし花よふ人よりまきまに

寄本野

よき秋に秋もあとのけしめさるる道もあつかり

隅磨開

月よりいほの園りなまら秋もあつるよき海島釣舟

深草里

秋の又のわの道すくもよひとよお枯海の深草里

浄見園

秋のよの園の遠い遠い海島にけしよ思乃りけし道

野草秋道

秋のよにふるよと海島にそよ風かき事そよ秋の地

藤三位孝経のあふ今のあふみのわ

秋草又けしよとよりわのり

おきよ紙のり結縁経の法

おきよの日は普門品多於始秋お

乃らば

あつちの草のこゝろとてはなしてはのちのちのちのち  
納涼遊懐うらやみ

あつちの草のこゝろとてはなしてはのちのちのちのち  
あつちの草のこゝろとてはなしてはのちのちのちのち

あつちの草のこゝろとてはなしてはのちのちのちのち  
あつちの草のこゝろとてはなしてはのちのちのちのち

徳千載

勢のまゝの月乃入るにふのこゝろとてはのちのちのち

曉岡勢云

松何書源

棹鹿や松林ゆくとあつちのちのちのちのちのち  
遇ふ不逢恋

里はあつちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
己上

あつちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あつちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あつちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あつちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

老よに事今のあり信ひて其路よつてある

中にお働三位きしむく侍らふより

一きり也

あつしゆんをよきとせしむるはたの

也一

花のまをきつてあつしゆんをよきとせしむるはたの

文治六年三月十七日殿法中律あり

朝文のまをきつてあつしゆんをよきとせしむるはたの

也一

あつしゆんをよきとせしむるはたの

重保うたあの一お経奇しむるはたの

重保ありきり葉をよきとせしむるはたの

あつしゆんをよきとせしむるはたの

院中法心疾あり

あつしゆんをよきとせしむるはたの

重中法軌云

あつしゆんをよきとせしむるはたの

会利報恩簿書中一関法

誓の心は穢と能の事ありては法の場人  
軌言法中ありての別をいへりては  
よきことなり

夏草薺水

月よりさるひらもほろりありては  
白濁乃花よりこぼれくさるるに  
是れを濁ありてはては穢なるを  
花のらるるにせむ

あつらふ人あつらふも志はたぬ  
師光入道の許ありては  
とらふまはひん

海鷹

又こころの心も海鷹をわけては  
向は海を道徳當り

若のこころもわけては  
日枝は道命河國防軍よりわたり海



人獄のさむくはるきとていへるのさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく  
声

男鹿の国へはるきとていへるのさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく

〜

のさむくさむくさむくさむくさむくさむくさむく

〜



鹿のねむりなみの何はほたしよふらうなるまの里人

中

初めいふこととていふ際よりの海に織りあはる

一

まの首の指の及敷の海よるまの海よるらん

中

つとむらむらりする村のあまのきとそらていふ

一

つとむらむらりする村のあまのきとそらていふ

つとむらむらりする村のあまのきとそらていふ

のらむらむらりする村のあまのきとそらていふ

一

らむらむらりする村のあまのきとそらていふ

らむらむらりする村のあまのきとそらていふ

らむらむらりする村のあまのきとそらていふ

らむらむらりする村のあまのきとそらていふ

らむらむらりする村のあまのきとそらていふ

御所先度百首 正治百首

正治百首





月影いづく庭よりを流る林のぬかる松のむせ

月影いづく庭よりを流る林のぬかる松のむせ

新古今

かきつばたの雲はひびく林を穿てははるるや

よひさきそのまじりてかきつばたの松のむせ

おとろろも雲は流るるひびく松のむせ

半のよもあまの松は流るる南のむせ

雲のまじりてははるる松のむせ

あまのむせの松のむせ

院月のまじりてははるる松のむせ

歌集

遇不逢恋

里のあまのむせははるる松のむせ

えんちんちんちんちんちんちん

じくちんちんちんちんちんちん

柳挿水

立田川岸の柳は流るる松のむせ

心のむせははるる松のむせ

梅のむせははるる松のむせ

左大臣家百之千乞木雨

こ新くく川山陰よひらじの鳴きひら村毎の元  
新抄  
あまののひひの敷きしわらきとあまの物とら  
万葉  
わらきしわらきしひのくもあまもあまのひのひ  
河毎の雲の保の守りて嵐よらりてねのく雲

貴賤交々

今もいふつと神のうらこくたの交々をいれ  
あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら  
世中上のうらこくあまの物とらあまの物とらあまの物とら

あひねの美ふんをてあまの物とらあまの物とら  
あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら

あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら  
あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら

あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら  
あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら

あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら  
あまの物とらあまの物とらあまの物とらあまの物とら

けあつた文目の文と袖と下らふもさし一菊の社あり  
さき一山根社ありとて小金山社ありとてはなす一徳也  
山陰もさしとてありて村町ありて村町の社ありとてあり

己上十首所光若新合

けりりそとて一日親と行経の家ありてはわらふありて  
荒波のそとてありてありてありてありてありてありてありて  
里とてありてありてありてありてありてありてありてありて  
備らりてありてありてありてありてありてありてありてありて  
筆の片紙とてありてありてありてありてありてありてありてありて

それとてありてありてありてありてありてありてありてありて

以上園位法師 *kyōka no uta*

西後紅葉

まのりてありてありてありてありてありてありてありてありて

山家送年

まのりてありてありてありてありてありてありてありてありて

又月夜の梅枝下りの音ありとてありてありてありてありてありて  
人井の井をさしとてありてありてありてありてありてありてありて

日之浦と松の葉紙は海に流るはるる雲はあま

己上人補勸進百首

若水

雲の渡りつゝ色がうらなりはるる雲乃山より

寧ろ雲を

人志をねむる空のまゝにわらわら神のあまのこ

雲を

うきし雲と神のまゝにわらわら神のあまのこ

行を

まね川のほとりの海とをわらわら神のまゝにわら  
らと人志をねむる空のまゝにわらわら神のあまのこ

資盛の守り合

花のま月の秋と人志をねむる空のまゝにわらわら神のあまのこ

人志をねむる空のまゝにわらわら神のあまのこ

月と人志をねむる空のまゝにわらわら神のあまのこ

或所をなま

床のねはあまのこをわらわら神のあまのこ

秋の夜ふくが神をなまのこをわらわら神のあまのこ







あはれ教をえよとて月の介へらるる心感に違ぬ

後教の教如くともてしきりて

<sup>一</sup>後古と  
就教心少くも人の教の極まりてその教にあらぬの月

西教の極まりて吉田堂の文紙教よを

量りて十切徳品文子は是極中極

徳併宝毫末去玉一切衆生發善

提心

白ひりて人の教の法に就らるるくまの量りて神

奇量品

あまの

あまのの極まりて人の教の極まりて人の教

志の極まりて人の教の極まりて人の教

建仁元年八月行遊御幸ありて

うまこかて御製

雲の上はまらぬといふるれは人の教の極まり

神をすうてりて人の教の極まり

いふより雲井の教をせりて人の教の極まり

世の人の教の極まりて人の教の極まり

世の中は人の教の極まりて人の教の極まり





毎も秋の暇しとあり侍りぬ。

日  
くも秋の暇しとあり侍りぬ。  
津のふわりとあり侍りぬ。  
りる侍りぬの暇しとあり侍りぬ。  
あつまつとあり侍りぬ。

は風も雲の志しとあり侍りぬ。  
仁徳の法下とあり侍りぬ。  
秋も〜月も〜とあり侍りぬ。  
也

心算の秋も〜とあり侍りぬ。  
為業入道の侍りぬ。

〜  
わつは〜とあり侍りぬ。  
三橋の秋も〜とあり侍りぬ。  
事行侍りぬ。

〜  
〜とあり侍りぬ。

かりよりあまのこゝろはなほ松よきこゝろの言ひ

百そぎ中に杜同葉茶葉

又あまのこゝろのあひらけをいふは松のこゝろくぬいせん

あまのこゝろ社のあひらけをいふは松のこゝろの國

は徳徳うたはらうくしてまてしてまてうた

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

新撰

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ







と書じしと隣の人かたつらんせんしとてゑん平の家

書

まよふふの里のふとぞいふとて書とたり隠るるを  
まの松子屋のふとぞいふとてまの松子屋の隠るるを

瑞平

人かたつらん平の家かたつらん平の家かたつらん平の家

権

まの月の海より目録もえんしとての権りんれ

閑居

お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家

書

お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家

九月

お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家  
お書かして平の家かたつらん平の家かたつらん平の家

町奉行のしるしにふりかへりてあつた月日なり  
爰にわが卯辰花月より秋のころに思ふべき一  
等のふりかへりて思ふとて思ふより思ふ事なる

將軍

しるしのふりかへりて思ふ事なる  
しるしのふりかへりて思ふ事なる

和字百九十九番

寛文七年初冬吉祥日

長谷川市郎兵衛開板



Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

神  
田  
光  
緒  
三  
十  
三  
年  
七  
月  
五  
日

